

2018年07月（08編）

2018年7月5日のアーカイブ

大雨洪水警報の日に





明日の「イカ料理」ツアーに備え、卓球で一汗かいたあと神戸へ向かう。

湊川の映画館 ・パルシネマ でワイフを降ろし私はいつもマイカーの面倒を見てもらっている新開地のガソリンスタンドへ。

エアコンの調子が悪くチェックをお願いしていたので診断して貰った。

コンプレッサーに異常はなく、フロンガスの減少が目立つのと、どこから侵入したのか?送気フィルターにポリ袋が詰まっていた。

フロンガスを充填しフィルターを取り替えた。

再び映画館へ、隣接の市営駐車場に車を置くが上映途中につき時間待ち(ワイフはただ今鑑賞中)。

二本目をワイフと鑑賞後映画館近くの「インド亭」でカレーを食し帰宅。

帰ってしばらくした9時過ぎ、旅行会社からツアーの中止が告げられた。

記録的な大雨になりそうだとメディアは言う。◆

2018 年 7 月 5 日 カテゴリー： [アート](#), [フード](#) 投稿者：yuyu-sha

2018年7月8日のアーカイブ

去りし豪雨のあとで

梅雨前線がもたらした豪雨は神戸を水浸しにした。

神戸新聞によると「今回の大雨で六甲の自然保護センターで4日朝～7日午後5時に計907ミリを記録した。(神戸新聞)」と、半端でない。

西日本から東海地方に停滞した今度の異常気象は自然に逆らってきた私たちへのしっぺ返しではないのか。

一応雨が収まった今日、ベランダに出て大学に咲くクマノミズキを撮った。レンズを90度右に向けて六甲山から摩耶山の峰々を収めた。





2018 年 7 月 8 日 カテゴリー： [チョット一息](#) 投稿者：yuyu-sha

2018年7月9日のアーカイブ

満潮後の入れ食い

大雨を降らした梅雨前線は何処へ行ったのか？

今日、関西で梅雨が明けた。

二週間ぶりに釣行。

アジが入れ食い状態。

獲れたアジはヒラアジとマルアジ。

黄色ぽいのがヒラアジで青っぽいのがマルアジ。

この辺の人は前者を「アカ」、後者を「アオ」と言い、

青は美味しくないといって、敬遠する。

贅沢なことだ。



2018 年 7 月 9 日 カテゴリー：[丸太小屋の四季](#) 投稿者：yuyu-sha

2018年7月14日のアーカイブ

[スリー・ビルボード／15時17分、パリ行き](#)（湊川・パルシネマ）



[スリー・ビルボード](#)

娘をあやめられた母親が警察の生ぬるい捜査を批判する看板を道路沿いに出す。

一方、捜査担当の警察官はガンに冒されながらも残り少ない生を犯人捜しに賭ける。

被害者の母親と犯人を捜す警察官との間に横たわる齟齬を徐々に埋めてゆく姿に先進国といわれている社会の新たな芽を感じる。

- ・監督・脚本：マーティン・マクドナー

- ・出演：フランシス・マクドーマンド／ウッディ・ハレルソン／サム・ロックウェル／アビー・コーニッシュ／ジョン・ホークス

- ・2017年／イギリス／Three Billboards Outside Ebbing, Missouri

15時17分、パリ行き

2015年8月、アムステルダム発パリ行きの高速鉄道で起きたテロ事件をクリント・イーストウッド監督が映画化。

氏の作品はエンタテインメントに社会性が重なり理屈抜きに良い。

犯人と格闘する3人のアメリカ人青年にクリント・イーストウッド監督が託すのは「アメリカ魂」の 覚醒か？

- ・監督・脚本：クリント・イーストウッド

- ・出演：アンソニー・サドラー／アレク・スカラトス／スペンサー・ストーン／ジェナ・フィッシャー／ジュディ・グリア

- ・2018年／アメリカ／The 15:17 to Paris

2018 年 7 月 14 日 カテゴリー：[アート](#) 投稿者：yuyu-sha

2018年7月21日のアーカイブ

全国一暑い地

昨日、全国の測候所で最も気温が高かったのが 兵庫県の豊岡 で 38.9° 。

そのとき当地を観光していた私たち。

最高気温を記録した頃、大石内蔵助の妻・りくの遺髪塚あたりをウロウロしていた。

今思えば相当な暑さだった。

測候所は環境の良い場所だろうから車を停めた駐車場辺りは40度をゆうに超えていただろう。

豊岡からの帰り出石に寄り蕎麦を食し、しばしの涼を食ったあと帰神。



2018年7月22日のアーカイブ

[イカの活け造りに 蕎麦挽き石臼](#)

豊岡への旅はイカに始まり蕎麦に終わった。

剣先イカの活造りはその日出た5種類のイカの中でも逸品。まだ生きているそのままと戴いた。

出石で蕎麦を戴いたが美味しく食べる基本的な前提に石臼挽きがある、蕎麦屋さんに飾ってあった臼を撮った。





2018 年 7 月 22 日 カテゴリー： [フード](#) 投稿者：yuyu-sha

2018年7月23日のアーカイブ

素劇 檜山節考(劇団1980)・考

『檜山節考』（ならやまぶしこう）は、深沢七郎の短編小説。民間伝承の棄老伝説を題材とした作品で、当代の有力作家や辛口批評家たちに衝撃を与え、絶賛された、当時42歳の深沢の処女作である。山深い貧しい部落の因習に従い、年老いた母を背板に乗せて真冬の檜山へ捨てにゆく物語。自ら進んで「檜山まいり」の日を早める母と、優しい孝行息子との間の無言の情愛が、厳しく悲惨な行為と相まって描かれ、独特な強さのある世界を醸し出している。（（ [Wikipedia](#) 最終更新日 2018.05.15）

この小説が映画化され田中絹代と高橋貞二の演じる親子になんとも言えぬ切なく悲しい思いを抱いた中学時代。

今回観た芝居に暗さがない。何故だろう？

無縁社会で孤独死が増える一方、アンチエイジングとかいって限りある体力に逆らったり、治らぬ病に抗う治療を施し病人を苦しめる傾向が社会に蔓延しつつある。

自然の摂理に従って人は生きてゆけばいい。

人の命は限りがある。限りある命と覚悟を決め、日々衰える機能を自覚し、一日一日を楽しく過ごし、いつ果てるとも悔いのない人生をおくる。このような生き方が出来る社会であって欲しい。

「櫛山まいり」を進んで受けた「おりん」の強さ・潔さに「無縁社会」でなかった頃の「むら社会の深みと拡がりを見る。人は死に向かうとき何も持たない、何も要らない、愛しい人に抱かれ旅立てればそれでいい。

「辰平」の背に抱かれ山を越え谷を渡る「おりん」の満ち足りた表情にそれを視る。

(神戸文化ホール<中> 2018.07.20)

	柴田義之 (又やん)		藤川一歩 (辰平A)		神原弘之 (辰平B)
	翁長諭 (又やん倅)		上野裕子 (玉やん)		水井ちあき (おりん)
	小出康統 (けさ吉)		栗栖裕之 (とよ)		大田怜治 (かね)
	光木麻美 (松やん)		丹由美子 (すぎ)		関根麻帆 (すえ)
	木之村達也 (雨屋)		山本隆世 (照やん/語りカラス)		すだあきら (飛脚)

神戸演劇鑑賞会 7月例会
劇団1980
素劇 櫛山節考

原作	深沢 七郎
構成・演出	関矢 幸雄
演出助手	河本 瑞貴
美術	山本 隆世
音響	齋藤美佐男
照明	増子 顕一
衣裳	上野 裕子
歌唱指導	平岩佐和子



信州の山あいの小さな村に嫁いできたおりん。この村には70歳になると、遙か離れた櫛山にまいるという掟があった。今年69歳になるおりんは、櫛山に行けば、神になった先祖が迎えてくれると信じていた……

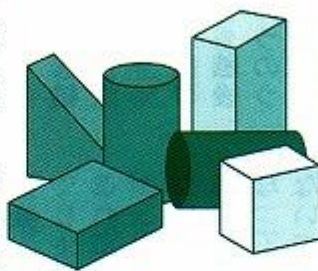
あらすじ

榎山節を考える

山と山とが連なっていて、どこまでも山ばかり。そんな山あいの小さく貧しい山村での日常を舞台化している。村の名はない。近辺の山村どうしは、向こう村と呼び合っているほど。食料が乏しく生きていくことが精一杯の現実から村のルールができた。このルールは先祖代々からの言い伝えで決まっている。その一つが「榎山まいり」であり、いわゆる「姥捨て」である。村のルールを守るとは村人たちの子々孫々の永続を願っていること。こういう過去があったからこそ、現代の私たちが生きていくともいえる。

舞台は、主人公のおりんと、隣家の幼馴染の又やん、二人の「榎山まいり」にまつわる心のあり方を軸に展開する。これに、年に一度の村の盆踊りで唄われる「榎山祭り」が三度くりや、栗の種から花が咲く」と、その替え唄が折り重なる。「芝居を観て、榎山節考の辛くて寒々しいイメージががらっと変わった。厳しさの中にこそ人間の優しさをより深く感じた」

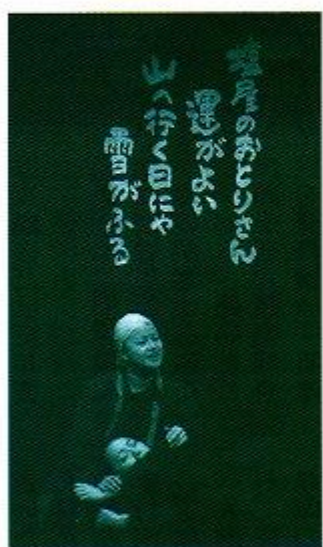
(33キヤッツ T)



劇団1980

「素劇」とは、演出家の関矢幸雄が提唱する独自の表現様式で、素朴・単純にして、より深い意図をあらわすための模索の中から編み出されたものです。すなわち、リアルな舞台装置や衣裳・メイクアップなどを一切排し、観客の想像力を大いに喚起して、物語の真意を表現していく演劇手法です。舞台で縦横に展開される、あふれる遊び心が私たちの想像力をかきたて、色鮮やかな里山の景色が浮かび上がることでしよう。

劇団1980、通称ハチマルは、横浜放送映画専門学校（現日本映画大学）の演劇科卒業生によって、1980年に結成された劇団です。劇団主宰者であり劇作・演出家の藤田傳の作品を中心に公演を続けています。ハチマル・アンサンブル



ともいわれる猛スピードのタベリあいを使使し、社会の底辺、辺境の地、埋もれた事件にスポットを当てます。そして、現代社会の矛盾や、そこに生きる私たち自身の姿を浮き彫りにします。ちなみに、劇団1980の神戸での例会は、1996年の『素劇あゝ東京行進曲』、1997年の『大往生』以来です。

おりんと又やん

この『素劇 榎山節考』に登場する、おりんと又やんの老人二人の生き方は全く正反対です。おりんはお山に行く覚悟を決めている一方で、又やんはお山には行きたくないと、先延ばしに延ばしています。この芝居を観たら、おりんに共感する方がきつと多いでしょう。でも又やんの気持ちの方が分かる方も結構いるのでは？そこで、この二人の考え方の違いの意味をちよつと考えてみるのも良いかなというところで、この二人の紙上座談会を開いてみました。

司会（今を生きる私たち） おりんさんと、又やんさん。今日は、お山行の準備でお忙しい中、神戸まで来ていただき、本当にありがとうございます。

2018年7月23日 カテゴリー：アート, 世の中のこと 投稿者：yuyu-sha

2018年7月31日のアーカイブ

「万引き家族」・おめでとう！是枝監督



遅ればせながら是枝監督の「万引き家族」を観た。

2018年・第71回カンヌ国際映画祭のコンペティション部門でパルムドール賞に輝き名実ともに「世界のKOREEDA」になった。

祖母の年金と万引きに頼り、生計をたてる家族の日常を描き、家族の新しい形を模索している。

今の日本社会の病理がぎっしりと詰まり、一つ一つを深く掘り下げながらこたえを観るものに託し、暗がりに射す光明を手探りで引き寄せようとしている。

権力者の謳う「日本社会の豊かさ」と対極をなす「日本社会の貧困」、そこから新しい日本の家族と社会が育つ。

監督・脚本：是枝裕和

出演：リリー・フランキー／樹木希林／安藤サクラ／松岡茉優

2018年6月／日本／120分

(於いてハーバーランド OS シネマ 2018.07.26)

2018年7月31日 カテゴリー：アート 投稿者：yuyu-sha